

『東方』三〇四号より

これからの豊子愷研究を考える

『中国文人画家の近代

——豊子愷の西洋美術受容と日本』にふれながら

楊 暁文(滋賀大学)

豊子愷(一八九八―一九七五)を研究する者にとつて、一九九八年は記念すべき年であった。氏の生誕百周年を迎え、彼と弘一法師の名で知られるその恩師李叔同との運命的な出会いが果たされた地・杭州に「弘一大師・豊子愷研究中心」が正式に設立されたからである。この年を機に、豊子愷に関する本格的な学術専門書が出版されるようになり、中国内外において李叔同師弟への注目度と関心度は高まって来つつある。

こうした中、豊子愷における西洋美術受容をテーマとした研究書が上梓された。西楨偉著『中国文人画家の近代——豊子愷の西洋美術受容と日本』(思文閣出版、二〇〇五年)である。西洋文化受容の先駆者である李叔同から話を起こし、豊子愷とミレー、ゴッホ、北澤楽天等とのかかわりを丹念に調べ、当時の中国と日本の画壇、美術界の動きにも目配りしつつ、中国文人画の近代化、中国文人の西洋美術受容の結論を導き出す、という全体の構成はまとまっている。巻末に参考価値の高い「中国・日本近代美術年表」や、読者にとって使い勝手のよい「索引」などをも丁寧に加え、なかなかの力作である。以下、この書を評しながら、これからの豊子愷研究について考えていきたい。

本書をまず評価したいのは地道な調査による新資料、未公開作品の発掘・確認作業である。文集や各種の選集、年

トップページにもどる

西楨偉著

『中国文人画家の近代——豊子愷の西洋美術受容と日本』
A5判・三八四頁・思文閣出版・五、七七五円



譜などが出尽くした感のある現況下、豊子愷研究に必要な基本資料が整備されてきてはいるが、未発見の文献などはまだまだ多く存在し、その発見時の学術的意義も大きい。例えば、評者の見つけた豊子愷と曹聚仁の絶交を理解するうえで不可欠な「二飯之仇」や、佐藤由佳氏が発見した一九五〇年代の豊のある側面をうかがわせる「嚴懲怙惡不悛的胡風反革命分子」(『解説《六千元》』、『論豊子愷』所収、天馬出版有限公司、二〇〇五年十二月)などは、豊子愷研究にある程度、文献的な貢献をしたといえるかもしれない。著者によつて実際にあることが確かめられた「西洋画之中国画化」(本書二七〇頁)なる文章も一九三六年前後の豊子愷を知るうえで重要な手がかりである。そして、著者と李叔同の作品「自画像」との次のような出会いには、より臨場感がある。

筆者がかつて茨城県取手にある東京芸術大学芸術資料館倉庫で見たときは、まだ額縁に収められていない状態で保管されていた。縦六〇センチ、横四五センチのこの作品を手につかずしりと重かった。塗り重ねた絵の具の量が多いためである。絵の具が生々しく、塗り重ねられたこの作品は、間近に見ると、人物以外に何が描かれているかがわからず、異様に見えたほどであった。

(本書二二頁)

こうした苦労に満ちた作業に支えられて本書が結実してきた面もあり、そのような地道な努力は、いつその深化が求められるこれからの豊子愷研究にとって欠かせないものである。

日本留学中に竹久夢二のコマ絵との遭遇が画家豊子愷を誕生せしめた重要な要因ではあったが、ミレー、ゴッホ、北澤楽天などとの関連があまり考察されてこなかったのも事実である。これらの画家が豊子愷の芸術的形成にどのような役割を果たしたかに焦点をあて、日本語の種本などとの比較もしつつ、考察を加えていったことが、本書の特色であり、高く評価できる点でもある。

ただ論の立て方や一部の観点や見解に関しては再検討の余地がありそうだ。たとえば第二章において、著者は豊とミレーを「労働」「子ども」「宗教」を描く画家と位置づけており、このような整理が行なわれやすいのも確かではあるが、豊の内実に即しているかどうかが問題となる。「労働」の場面を豊が作品にしたことは少なくないが、「労働」そのものよりも、より高い次元、豊自身の言葉を借りていえば「正面から大人社会の現状を描こうとする」「(「我的漫画」)レベルでそのことが理解されるほうが豊の全画業、

▶ トップページにもどる

全文学創作の実際により接近しているかもしれない。換言すれば、それをあくまでも「大人社会の現状」の一部分として豊が観察し(このことは仏教信者の豊における宗教的諦観とは無関係ではないはずだが)描写していることとすることは、その漫画と随筆における題材の多様さ、象徴性を本質的特徴に、つねにモチーフを掘り下げようとする豊の描き方からすれば、当然の成り行きのように思える。

また、豊子愷における「子ども」の発見もミレーと一定の関係がある、との主張もある程度首肯できる。しかし、豊子愷特有の「童心」概念、「童心」が彼の芸術、文学、さらに人生決断(たとえば李叔同のように文芸と決別して出家するか、或いは在家の形で仏道に帰依しつつ創作を持続するかの人生選択)において重大な意味を持つという文脈のなかで、それを捉えたほうが、より豊子愷独自の世界の実像に迫れるように思われる。現にミレー受容が見受けられない一九六〇年代に入ってから、豊子愷が数多くの感動的な児童漫画(『豊子愷児童漫画集』参照)や子どもの日常を活写して読む者の胸を強くうつ随筆「南潁訪問記」などを創作し続けたことは、彼にとつての「童心」の持つ重さを物語る。

図像の対比も画家である豊子愷の研究において今後も有力な方法の一つとなるに違いないが、この「利器」を利用する際に慎重を期する必要がある。豊子愷の絵におけるミレーやマティスなどの影響は、その『少年美術故事』『芸術趣味』『西洋名画巡礼』『西洋画派十二講』などを踏まえての分析であれば説得力をもつが、豊子愷の主体性、自主性、能動的な創作意欲などにあまり考察を加えなかった図像比較は牽強附会の印象を読者に残してしまう恐れが本書にあった。紙幅の関係で一例だけを挙げると、著者は豊の

漫画代表作の一つである「隣人」を北澤楽天の「人の葱我葱」の影響を受けたとして、豊の「同居尽小人」を含めた三図を比較して、次のように述べている。

よつて、《隣人》は制作時期が《同居尽小人》よりかなり先ではあるが、《人の葱我葱》は豊子愷の目を惹いた作品であり、《隣人》を創作する際においても、《人の葱我葱》が念頭にあったと考えられる。（本書一八七頁）

豊子愷自身もこの絵をととても重要視しており、まず「隣人」を描いた二年後の一九三二年の随筆において、その創作過程などについて明確に説明している。

這是我從上海回江灣時、在天通庵附近所見の実景。

（豊子愷「隣人」）

二十余年後に書いた随筆の中で再びこの絵について、豊は以下のような解釈を行なった。

這也是我在馬路上看到的光景。

（豊子愷「代画」）

以上を総合すれば、豊が實際目にした風景を絵にしたのが「隣人」制作の実態であり、簡潔かつ暗示性に富んだ構図を通して人類社会の「羞恥的象徴」（「隣人」）「人間羞恥的象徴」（「代画」）を表現しようとするところに、豊の真意があった。

それにしても、日中両国の資料、時にはそれ以外の言語による資料をも駆使して、豊子愷における西洋美術受容を対象とした本書の意欲的なとりくみは有意義である。同書

トップページにもどる

の「はじめに」にある、「中国民国期の西洋美術受容は欧米からの直接摂取のほかに、日本経由というルートが確固として存在したにもかかわらず、研究はまだほとんど手付かずの状態である。本書はこの分野の空白を埋めようとするもの」（三三頁）との著者のねらいは、全体的に見てみれば、ほぼ達成できたと評すべきであろう。

だが、豊子愷研究には埋めなければならない空白はまだ数多く残っている。

西洋美術受容と同時に、豊子愷は西洋音楽受容を行なった。一九三〇年出版の『近世西洋十大音楽家故事』と『近代二大楽聖の生涯と芸術』、一九三二年刊行の『世界大音楽家与名曲』、一九三三年上梓の『西洋音楽知識』、それから雑誌に連載した『音楽故事』（一九三七年）等等。西洋美術受容の際と同じく、それらには日本語の種本が確実に存在した。日本の研究者にとって挑戦する価値のある仕事なのだ。

豊子愷の日記文学。日中間に戦火を交えた時期に、豊は老若男女十数人を連れて各地を転々としながら文学性の高い『教師日記』や『病中日記』を書き続けた。前者に関しては、小野忍氏のユニークな論考「豊子愷『教師日記』」が見られ、最近、大野公賀氏による再挑戦があった（前掲『論豊子愷』所収の「追求精神的自由——従『教師日記』読豊子愷」参照）。『病中日記』（さらにその詩詞、書簡）などに関する研究の出現が期待される。

豊子愷とソビエト（ロシア）。いままで豊と日本、中国、西洋との関係が注目されてきたが、新中国成立後彼はロシア語を独学し、ソビエトの音楽やロシアの文学を翻訳紹介した業績も研究されるべきである。その際中国、欧米以外のロシア側の研究者との関係プレーも必要となつてこよう。本書の「あとがき」で「豊子愷という山脈をずいぶん歩い

たものだ」(三二八頁)と著者は振り返る。芸術のほとんどあらゆる領域に足跡を残した氏を「山脈」のように感じるものが評者にもしばしばあった。この大山脈を形作る山々を踏破し、登頂を果たしてはじめてそのすべてが明らかになるであろう。豊子愷研究の道程はまだ長い。

[トップページにもどる](#)